

子どものマナーと自己肯定感を育む

原田 さとみ

家庭教育応援講座講師

NPO マナー教育サポート協会・認定講師

自己肯定感アカデミー高松校・認定講師

はじめに

わが子の産声を聞いた瞬間の感動を覚えているでしょうか。

この世に誕生してくれたことへの深い感謝。

「ずっと健康でありますように」という純粋な願い。

あの時、親は子どもに何も求めてはいなかった。

ただ存在していてくれるだけで十分だったはずです。

しかし、

子どもが成長するにつれ、親の願いは少しずつ形を変えていきます。

「もっとこうあって欲しい」「こんな職業について欲しい」

「だからこの大学に行って欲しい」・・・そんな期待が、いつの間にか

子どもへの“評価の物差し”になってしまうことがあります。



大切なこと

親がしなければならない一番大切なことは、【人を大切にすること】を伝えることです。

なぜなら、

人を大切にしない人は、人から大切にされない。

家族を大切にしない人は家族から、友だちや仕事の仲間を大切にしない人は、友だちや仲間から大切にされない。これは大人の世界だけでなく、子どもの世界でもまったく同じなのです。

まずは、大人である私たち自身が「人を大切にする」姿勢を示さなければならないのです。

マナーと自己肯定感

では、マナーとは何だろうか？

私は『自分がされて嫌なことはしない。自分がされて嬉しいことをする』という

【怨（じょ）の心】だと考えています。そしてもう一つ【マナーは愛】です。

相手を思いやる気持ちが形になったもの、それがマナーなのだ。

私はその信念をもって、日々多くの方にお話をしています。

マナーが自然と身についている子どもは、『自己肯定感』が高いことが多いです。

自分が大切にされてきた経験があるからこそ、相手も大切にできる。

自分の存在が認められているからこそ、安心して人と関わることができているのです。

逆に、

自己肯定感が低い子どもは、マナーの一つひとつが“失敗しないための行動”になっています。

「間違えたら怒られる」「また注意されるかもしれない」という不安が先に立ち、心からの挨拶や思いやりの行動が難しくなっているのです。

だからこそ、

子どもにマナーを教えるとき、私たち大人が意識したいのは「できたかどうか」ではなく、「どんな言葉で伝えるか」なのです。

「なんでできないの」「恥ずかしいでしょう」と叱られ続けられれば、子どもは“自分はダメだ”という感覚を強めてしまいます。

一方で、「ありがとう」「助かったよ」「あなたがそうしてくれて嬉しい」・・・と伝えられた子は、自分の行動が誰かを喜ばせたという実感を得ます。

それが【自己肯定感】を押し上げ、次の行動につながっていくのです。

「言葉づかいは心づかい。美しい言葉には魂が宿る」・・・“言霊”という考え方があるように、「ありがとう」「ごめんなさい」「こんにちは」「さようなら」これらの言葉には不思議な力があり、古代から良い言葉を使えば良いことが起こり、悪い言葉を使えば悪いことが起こると信じられてきました。

子どもが良い言葉を自然に使えるようになるためには、まず大人がその言葉を日常の中で大切に扱うことを意識して取り組むことが必要です。



さいごに

思いやりのある子は、【笑顔が美しい】

自分の【存在意義を信じている】からこそ、“人にやさしくできる”のです。

これこそが、“自己肯定感”なのです。

子どものマナーを見るとき、行動だけを切り取って評価をするのではなく、その背景にある“心の育ち”に目を向けることが大切です。

マナーは教え込まれた結果ではなく【大切にされてきた証】なのですから。